

普及指導員調査研究報告書

課題名 萩たまげなすの生産・販売対策

萩農林事務所農業部 担当者氏名 中野 裕子・小山 寛史

1 普及活動の課題・目標

萩たまげなすは、伝統野菜等振興育成事業（注1）により、栽培手法・販売手段が確立され、萩、長門両産地で地元にも根付きつつある品目である。また、萩市では、H24年から「萩の木になるモノづくり協議会（注2）が行う「萩の伝統野菜復活プロジェクト」（注3）に位置づけられ、更なる消費拡大に取り組んでいる。

また、生産者の栽培技術は向上し、1株から収穫される萩たまげなすの収穫本数は増加したが、収穫期間が短いことや生産者と実需者の求める価格の不一致、出荷の不安定さ、販売量の伸び悩み等が課題として考えられている。

そこで、産地の生産及び販売面の課題を次のように整理し、目標を設定するとともに、関係機関と連携し、普及活動に取り組んだ。

(1) 課題と目標

ア 生産面

- ・ 収穫期間が短い（5月20日頃～7月上旬）
→早期作型実証による収穫時期の前進化による収穫期間の拡大
- ・ 年間生産量、日別出荷量が不安定
→巡回指導と出荷予測による安定供給体制の確立

イ 販売面

- ・ 生産者と実需者の求める価格の不一致等による販売量の伸び悩み
→地元での消費拡大
→やまぐちブランドへの登録、販売促進活動の支援

2 普及活動の内容

(1) 生産対策

ア 早期作型実証による収穫時期の前進化による収穫期間の拡大

- ・ 苗の生産：播種～接ぎ木までは生産者が行い、その後は萩市の鉢物農家で育苗を依頼した。生育状況に応じて栽培指導、接木指導を実施した。（台木には、耐病VFを使用した）
- ・ 蕾が確認できる程度まで育苗した苗を部会員が栽培し、JA指導員と栽培指導を実施。
- ・ 1番花の開花日、収穫日を調査した。

イ 安定供給体制の確立

- ・ 土壌分析結果から戸別に施肥を検討し、指導した。
- ・ 2週間に1度、生産者全員、JA指導員と全戸巡回を実施し、生育状況を確認し、商品果率を部会員と確認した。
- ・ 個人ごとのホルモン処理花数を毎週聞き取りし、②で確認した商品果率を掛け、出荷数量の予測を行い、農業振興課を通じ、全農、東京事務所等へ情報提供した。

(2) 販売対策

ア 加工品「萩たまげなすバーガー」の開発、販売までの支援

- ・ 部会女性が考案した萩たまげなすのはさみ揚げをヒントに、萩たまげなすを用いたハンバーガーの開発を地元のレストラン運営会社に提案した。
- ・ レストラン運営会社と萩の木になるモノづくり協議会と連携し、レシピの作成、試作品の作成を支援した。

イ 地元小中学生の体験交流

- ・ 小学生による萩たまげなすの定植、収穫体験実施を支援した。
- ・ 中学生による聞き取り学習において、生産者との交流体験を支援した。

ウ やまぐちブランド登録への誘導、販売促進活動の支援

- ・ やまぐちブランドへの登録を誘導し、支援した。
- ・ 需要対応型産地育成事業を活用し、販売促進資材として部会のオリジナルキャラクターを活用した幟の作成を支援した。
- ・ 作成した幟を活用し、道の駅萩往還で、部会員による試食販売活動を支援した。

3 普及活動の成果

(1) 生産対策

ア 早期作型実証による収穫時期の前進化による収穫期間の拡大

- ・ 育苗中の苗立枯病で、予定していた定植本数よりも減少したが、3月17日 56株を定植した。
- ・ 早期作型では、通常よりも約20日早く開花し、約18日早く収穫できた。また、GW中も500g以下ではあったが収穫することができ、萩たまげなすバーガー用として活用することができた（表）。
- ・ 生育初期から中盤まで、4月の低温も影響し、樹勢が弱く、一部が細いナスになり、虫害がやや多くなった。
→生育初期の温度維持が不十分であった点に加え、耐病VF台木を用いたことも樹勢に影響したと考えられる。
- ・ 販売面でも、他のナスが出回らない5月中の出荷が望まれるので、継続して実証してほしいという意見が出た。

表：早期作型と慣行作型の比較

	早期	慣行
定植日	3/17	3/19
1番花開花開始日	4/6	4/26
1番果収穫開始日	4/30	5/17
合計収穫段数	12段 (最大13本)	10段 (最大11本)

イ 生産安定対策

- ・ 個人ごとのホルモン処理数を確認し、商品化率を確認することにより、出荷予測の精度はやや上昇したが、出荷本数が予測と大きく異なることもあり、さらなる改善が必要である。
- ・ 販売側からは予測は確実ではないが、目安として必要という評価が得られた。

(2) 販売対策

ア 地元での消費拡大

① 萩たまげなすバーガーの開発

- ・ 5/4 地元の道の駅、レストラン運営会社の直営店にて、販売された。
- ・ 消費者からは、美味しい、萩たまげなすの PR になっていると評価も高かった（部会員への聞き取り）。
- ・ 販売したレストラン運営会社は消費者からの評価も良かったため、販売を継続し、コスト面でもパンを用いたバーガーと大差なく、継続できたという評価が聞かれた。



- ←萩たまげなすのフライ
- ←トマト
- ←見蘭牛ハンバーグ
- ←レタス
- ←萩たまげなすのフライ

萩たまげなすバーガー

② 地元小中学生の体験交流

- ・ 椿西小学校 6 年生が定植、収穫体験の実施支援を行った。定植、収穫体験は、椿西小学校 6 年生の恒例行事になりつつあり、収穫した萩たまげなすを用いた調理実習も小学校で行われるようになった。

イ やまぐちブランドへの登録、販売促進活動の支援

- ・ 萩たまげなすの「やまぐちブランド」登録を支援し、農産物第一号として登録され、萩、長門両部会長が登録式に出席した。
- ・ 作成した販売促進資材（幟）を活用した販売促進活動を実施することにより、生産者が自ら、売れ行きや消費者の感想を直接聞く機会につながり、生産者の販売に対する意欲、関心が高まった。



ブランド登録式の様子（部会長）



生産者による試食販売と幟

4 今後の普及活動に向けて

(1) 生産対策

ア 早期作型実証による収穫時期の前進化による収穫期間の拡大

- ・ 生産者による育苗を実施した結果、苗立枯病が発生し、定植本数が減少。
→ 育苗を業者に委託するなど、早期定植苗の安定生産体制を整備する必要がある。

- ・ GW 期間開始時点では、小さなサイズの田屋ナスしか収穫できなかった。
- 萩たまげなすとして収穫、販売が可能となるよう定植時期を早める等の実証計画の改善が必要である。
- また、栽培初期に、樹勢が弱くなったため、樹勢を維持できる温度管理や栽培指導が必要である。次年度は樹勢の強いトルバム・ビガー台木で実証予定。

イ 生産安定対策

- ・ 生産者からの聞き取りや巡回の回数を増やし、出荷予測の精度を上げる。
- ・ 出荷日を生産者ごとに分ける等、日別出荷量の調節等を検討する必要がある。

(2) 販売対策

ア 地元での消費拡大

- ・ 萩たまげなすバーガーの継続的に販売出来るよう支援する。
- ・ 地元小中学生の定植、収穫体験等の継続的に実施するよう支援する。

イ やまぐちブランドへの登録、販売促進活動の支援

- ・ 現在の登録基準では、秀品のみがやまぐちブランドへ登録されている。しかし、店頭で販売される場合の多くは、秀品と優品が同様に扱われるため、やまぐちブランドを活かした販売が難しい。
- 優品もやまぐちブランドへ追加するよう誘導する。または、ブランド品のみにシールを貼る、袋を替える等で差別化を図る方向で検討が必要である。
- ・ 部会員が中心となった販売促進活動を継続的に支援する。

(3) 担い手対策

萩たまげなす専門部会では、部会員数が H22 年の 6 名から H25 年には 4 名に減少し、高齢化も進んでいる。H26 年には、部会員の後継者が独立し、新規就農として、萩たまげなす栽培に取り組む予定である。

→ 後継者の育成・指導に部会で取り組む必要がある。

※1 伝統野菜等振興育成事業

平成 11 年～13 年にかけて、山口県で古くから栽培されている伝統野菜の実態を調査し、特性の解明、種の保存、利活用検討、販路開拓、PR 等を実施することで、伝統野菜復興への取組として行われた事業。萩たまげなすはその品目の一つ。

※2 萩の木になるモノづくり協議会

「萩の木になるモノづくり「食」実践プロジェクト」の実施主体（厚生労働省委託事業 地域雇用創造推進事業、実践型地域雇用創造事業）として萩市が設置した協議会。萩でしか食べられない地産地消にこだわった「食」や「食の土産品」の開発にも取組み、観光関連産業分野と組み合わせ、総合的、一体的に新たな雇用機会の創出を図ることを目的として、伝統野菜の復活、加工品開発、料理・スイーツ開発、食発信等のプロジェクトを行っている。

※3 萩の伝統野菜復活プロジェクト

萩の木になるモノづくり協議会の行うプロジェクトの一つである。目的は、新たな地域資源として萩の伝統野菜の復活や特産品の創出、食文化の次世代への継承、少量多品種農作物の付加価値付けによる生産者の所得向上。対象品目は萩たまげなす、萩ごぼう、萩ころげ蕪、かきちしゃ（大島在来種）、あざみな（むつみ在来種）、萩にんにく、大島そばなど。